

# 「性の健康教育」における高校生の成長過程の研究 我が国「性教育」の経緯と学習支援者としての養護教諭の機能

鹿 間 久 美 子

## Abstract

- (1) “Sexuality education” in Japan has been changed based on social factor and social needs. In recent years, the terms of “sexuality health education” have been instituted based on WHO definition of the health , so this research takes the position that “sexuality health education” indicates.
- (2)When “ sexuality health education ” is given at a high school class , for leading student’s precise understanding, the program have to be developed with consideration so that their demands meets educational needs .  
The school health nurses (Yogo teacher ) for their own occupational activity try to see a student as a “whole” personal , so they make up “ sexuality education ” on the “ stock of knowledge at hand ” with students for matching their demands and educational needs .
- (3) Through the practice of the “sexuality health education” from school health nurse , the students have gotten precise understandings of sexuality improved their personality development.

キーワード……性の健康教育 高校生 養護教諭

## 1 研究の目的

高等学校の保健室へは、多様な問題や悩みを抱えた生徒たちが日々訪れる。多様な問題や悩みの中でも性に関する相談では、生徒が直面する具体的な内容が多い。この保健室での性に関する相談活動においては、健康診断業務のようにシステム化されたものではない。保健室へ訪れる生徒と保健室を運営する養護教諭との関わりの中で自然発生的に行われる活動である。養護教諭自身の人格や「生き様」を問われながら、相談する生徒との共同作業で構築していく活動である。また、養護教諭は、性の相談活動を積み重ねる中で、意図的に「性の健康教育」を健康教育に組み込む作業をしてきた。この健康教育を組み込む作業の蓄積から、養護教諭は多くの生徒に共通する健康課題を認識する。そして、学級集団を対象にした「性の健康教育」を進めていくのである。

そこで、本研究では、(1) 我が国の「性教育」開始からの経緯と「性の健康教育」への移行を概観し、(2) 養護教諭が行う「性の健康教育」、主に学級での指導の構造と意義を生徒との関係性に注目しながら考察し、(3) 実際の実践事例を示し、学習支援者としての養護教諭が生徒の成長過程の中でどのような意義を持ち機能するか、について研究することを目的とする。

## 2 我が国の「性教育」開始からの経緯と「性の健康教育」への移行

### 2-1 「性教育」という用語の持つ意味

戦後（1947年）文部省は、全国に「純潔教育の実施について」を通達した<sup>1)</sup>。

これによって2年後（1949年）には、我が国初、中学校と高等学校の「健康教育」の中に「成熟期への到達」という項目が示され教科書に位置付けられた「性教育」が登場した。さらに、同年「性教育のあり方」が発刊され、執筆者の安藤は「純潔教育は性教育の一部 主として性道徳 を教育の対象とするものであります」と述べ、「性教育の開始時期を画一的に年齢で決めることは妥当ではなく個人化すべきものであり」注意すべきことは真実と露骨とを混同してはならない」と現代にも通じる示唆をしている<sup>2)</sup>。また、当時は戦後の混乱状況の中で必要に迫られ、性道徳中心のまさしく純潔教育の部分だけがクローズアップされてしまった。この偏りは、近年まで性教育の受け止め方に混乱を招いている。

その後も「純潔教育と性教育とは相違がない」と論じられながらも、1986年「性教育」ではなく、「生徒指導における性に関する指導」が文部省から出された<sup>3)</sup>。これは、不純異性交遊などの性非行防止的なニュアンスが強いものであった。続いて、学習指導要領の改訂によっても「性教育」という言葉は使われてこなかった。文部省の見解によれば、「性教育という言葉を使わないのは、その言葉は人によって考えや概念が違っているからです」「意見が積極的に分かれる。そこで人間として全体的に望ましい行動を取れるようにするといった、もっと広い概念を持った言葉として性に関する指導という言葉を使っている」<sup>4)</sup>という。

この文部省の懸念が現実問題として提起されたのが1995年である。小学校の5・6年生に保健の副読本ができ「性教育元年」というネーミングでマスコミの報道があった。その後も「性教育論争」は続き、社会的に問題となった小学校2年生でおこなわれた「性交教育の実践」があった。このいわゆる「急進的性教育」に対して、内山は「人間行動や生活における性の現実を忠実に反映しない「身体的」肉片・形態的知識だけで性の現実、性交の事実を学ぶことは、おかしな学習、偏った認識、誤った理解を育てることになる」「性教育内容の構成原理の検討・研究を基礎的な側面から進めるべきであろう」<sup>5)</sup>と指摘している。

同じ時期に、河合は「性を教えることは非常に難しい。しかしまた、それだからこそ教える必要がある、とも言えるわけで、その必要性はますます高まってきていると思われる。ただ、それを誰がいつどこで、いかに教えるかという点では相当な慎重さが必要である」と述べてい

る。さらに、河合は「性」についてや「性を教える」という根本的な内容について、次のように述べている。「性は心と体をつなぐものである。したがって、それは身体のこととしても、心のこととしてもある程度まで説明できる。しかし心のこととして語るのは難しいが、身体的な方は正確な知識が与えられるので性教育という生理的、生物的な知識を教えることに重点がおかれがちになる『身体といっても、それは人間が客観的対象として見ることのできる身体と、自分が生きている身体という二重の意味を持っている。身体の構造、機能として性を教えるのは、前者の意味においてであるが、自分が生きることとしての性、という面も忘れてはならない』<sup>6)</sup>と述べている。

このように学校において「性教育」を語るときは、対象となる生徒を見失った議論をしてはいけない。刻々と変化し続けるその場・その時を生きる人間としての生徒を捉える。次に、可能な限り全体的に生徒を見つめ、全人的に性教育が進められるように考えていく必要がある。

「性教育」と表現されたのは、1999年「学校における性教育の考え方進め方」で文部省から初めて示されている。内容は、学校において性教育を進めるに当たっての基本的な考え方や方向性である。例えば、「学校はすべての児童生徒に対して人間尊重、男女平等の精神の徹底を図るとともに、人間の性に関する基礎的基本的項目を正しく理解させ、同性や異性との人間関係や、現在及び将来の生活において直面する性に関する諸問題に対して、適切な意思決定や行動選択ができるよう、性教育を充実する必要がある」<sup>7)</sup>（下線は引用者による）とある。下線部分の表現は、薬物乱用防止教育・喫煙予防教育・生活習慣病予防教育など健康教育に取り入れられている社会心理的な教育を重視した表現を使い、性教育を健康教育として考えていくことを示している。目標及び指導内容は、身体的・心理的・社会的な各側面からの指導概要である。

## 2-2 性教育から「性の健康教育」へ

学校の教育活動は、学習指導要領により教育課程が編成される。しかし、学習指導要領の中に性教育の記述はない<sup>8)</sup>。性教育はどのように進めていくのか、何をどのように教えるのか。性教育がなぜ単独の教科にならないかについてここで是非を論じるゆとりはないが、性教育が単独の教科として存在すれば少なくとも何をどのように教えるかという問題が発生しないことは確かである。現段階では、学校の教育目標に基づき教育課程に位置付ける年間指導計画の作成を行ったうえで全教育活動の中でおこなう。例えば、教科・総合的な学習・特別活動の内容として示されている人間の性に関する事項を性教育の視点から発展的に扱うのである。

ここで問題となるのは、一人の生徒の状況を考えて、それぞれの場面で展開された性に関する内容を関連付けることが可能かどうかである。例えば、生徒は、日常生活の場面で社会と学校と家庭がそれぞれ異なる価値観で動いていると感じているという報告がある。図1の「一般社会」の意味は、生徒が卒業後巣立っていく場所と、日常接している学校と家庭生活以外の場所という2つの意味を持つ。しかし、教師の方は、学校での指導が社会へ巣立たせるための

準備と考え「学校を社会の縮図」<sup>9)</sup>と捉えている。

以上のような生徒の志向する学校の位置付けから、それぞれの場面で展開された性に関する内容を関連付ける場面が必要だ。性に関する学習を統合し深化発展させる学習が必要である。

次に、性教育は、社会文化的な要因の影響を強く受けてしまうという歴史上の経緯がある。

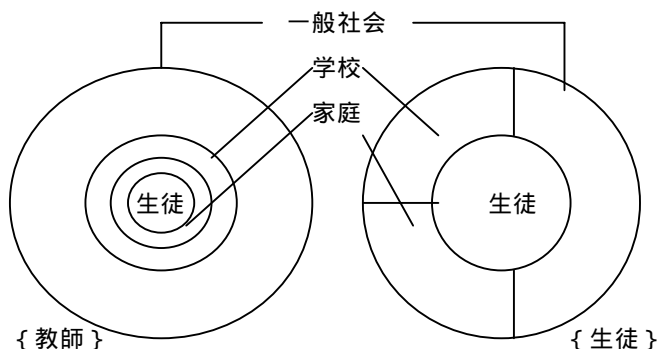


図1 学校の位置付け（長谷川，1999）

佐藤は、「性教育が難しいといわれる一番の理由は、あまりに大人が性に対してわいせつ感を持ってしまっていることではないでしょうか」と親の立場から述べている<sup>10)</sup>。学校現場で性教育を開始する場合の非常に大きな課題である。

宗像は、「学校、職場は地域社会の一部である。地域の社会文化システム（信念、習慣、風俗、美德、倫理、道徳、社会規範などからなる特定の秩序構造をもつ体系）が、性交、コンドーム、同性愛などについて表立って語れることを回避させることがある。無理にそれについて教育すると、個人の自我葛藤、文化葛藤をもたらす」「地域社会の社会的抵抗が大きい」<sup>11)</sup>と述べている。どのような内容が個人的にも社会的にも受け入れられる内容であるのか。

学校現場で「どのような知識を提供し、価値観を育てていくか」と「公教育として社会的抵抗をもたらさない指導内容は何か」というズレをクリアしなければならない。

### 2-3 「性の健康教育」とはなにか

近年、性教育を「性の健康教育」であると意味付ける論文が世界的に多く見られるようになった。我が国では、10年以上前から内山によって次のように示されている。「性教育の内容領域は大別して 身体的側面 心理的側面 社会、文化的側面の三領域で構成されている。この三大領域の構成はおよそ一般的に容認されるものとなっている。この原型を何に見るかは、いろいろ議論のدةところであるが、単純につなぐと WHO の健康の定義の三つの観点と「そっくり」ということになる」<sup>12)</sup>。

WHO (World Health Organization, 世界保健機関) の健康の定義は、“Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.” であり、1951 年厚生省官報掲載では「健康」を「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」と訳されている。

これを 1998 年の WHO 執行理事会において WHO 憲章全体の見直し作業の中で「完全な肉体

的、精神的、Spiritual及び社会的福祉の Dynamicな状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」と下線部分の追加が議論されている。(2004年現在批准はされていない)

武田は、「性の健康と教育」の中で Spiritual を含めた4つの健康を示している(表1参照)。これに基づいて性に関する4つの健康の積極的・消極的状态について考察している(表2参照)。具体的な方法は、「性の健康を身に付けさせる教育法は、必要な知識を行動化させることにあり、WHOが提唱するライフスキル教育が有効である」また、「最も重要な鍵は、セルフエスティームの育成である」としている<sup>13)</sup>。

筆者もこの立場を取るため、以降は「性の健康教育」という用語を使う。

表1 4つの健康(武田,2003)

4側面	テーマ	健康とは	機能	訳
Physical	Body	身体的状態、活動や 感覚の Well-being	感覚、体力、運動能力、 身体的活動性	体の健康
Mental	Intelligence Mentality	知的状態、活動の Well-being	知識、知能、認知、 思考、判断	知性の健康
Spiritual	Soul. Spirit	心情的状態、活動 気持の Well-being	心情、気持、感情 意志、気力	心の健康
Social	Human Relation Society	人間関係 社会生活 } の Well-being	対人関係、所属組織 家庭、学校、職場 地域社会における共生	対人(関係) の健康

表2 性に関する4つの健康(武田,2003)

	積極的	消極的
Physical	性と生殖に関する身体的機能が良好である。生理的満足が得られる状態である。	性感染症や性器・生殖器の疾患がない。性機能不全や性行動の障害となる身体的異常がない。
Mental	性と生殖に関して必要な情報・知識を入手し、状況や将来を考えて判断し、適切な意志決定と行動選択ができる。	性と生殖に関する知識や情報が不足、欠損していない。成り行き任せ、相手任せの主体性欠如、判断力不足がない。
Spiritual	性と生殖に関し、満足な状態である。将来に希望をもち、安らかな気持で、快適な生活ができる。セルフエスティームをもって肯定的なセクシュアリティを生きる。	性と生殖に関し不満がない。将来の生活、自分の人生に関し不安や心配がない。自己不信や劣等感がなく、否定的セクシュアリティがない。
Social	人間関係性関係で、相手と仲良く助けあって生きていくことができる。相互の人権を尊重し互いに愛情豊かに相手を思いやる。	人間関係、性関係で、対立、いじめ、差別、トラブル、紛争がない。互いに相手に対する人権侵害がない。

### 3 養護教諭が行う学級指導における性の健康教育の意味と構造

#### 3-1 生徒が持つ既存の意味地平との融合

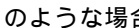
性の健康教育を具体的に実施するためにはどのような内容をどのように指導するのか。最も重要な点は、生徒が「自分自身の健康な生活を送るために性の健康教育が役立つものだ」と感じなければならないのである。また、生徒の日常生活からかけ離れた内容や理解が困難な言語表現では役に立つものとはならないのである。

高等学校では、医師を招いて性教育講演会を開催する機会が多く見られる。麻生は「とにかく医師がそういうところに入っていくと、性器解剖学、勃起の機序というところばかり話してどういう風に性を営んでいくかということに踏み込んだ医師はあまりいないのではないかと思います」<sup>14)</sup>という。数少ないことは確かである。

松下は、「知識を言語的・社会的な実践に埋め込まれたものとして、それゆえ身体や感情の次元のものを含む相互に複雑に連関している三次元的な意味ネットワークと一体となっているものと捉え、知識の意味地平と学習の既存の意味地平の「融合」こそが伝達や学習であるとする教育観への転換である。……(中略・引用者)……あらゆる教育が「深い理解」をめざすということである。そのような転換が成し遂げられるほどに、知識と行為を“媒介する”諸々の第三の要素は不必要になるであろう」<sup>15)</sup>と述べている。

そこで、性の健康教育において「深い理解」を引き出すためには、知識の意味地平と学習の既存の意味地平の「融合」が必要である。そのためには多様な意味地平を持つ他者の存在を認識させ、自己の意味地平（関心や態度・信念を含む）をすり合わせていく作業、即ち自己の概念と他者の概念理解を思考の中で共存させる活動をするのである。

この場合、性の健康教育を担当する教師も他者である。教師は、自分自身が持つ性を生きている「おとなモデル」として存在する。指導する場面で使われる言葉の表現だけではなく、雰囲気（非言語的な例えば視線、表情、動きなど）により生徒の反応に影響をもたらす。また、性の健康に関するエイジェント<sup>16)</sup>としての機能を持っているのである。このエイジェントとしての機能は、教師の「個性や持ち味」、さらに生徒との関係性にも左右されるが、むしろ性の健康教育を行うための姿勢と綿密な準備に深く関わっている。

性の健康教育を行うための準備は、指導する内容の構成を生徒のディマンドとニーズから組み立てる作業がある。生徒は性について学びたいと思っているのか。学びたいのであれば何を学びたいのか（ディマンド）。さらに、ディマンドは、「学びたいと表現する内容」と「自己の内面に持っていても公に表現しない悩み」との差異はないのか、という主観的な問題についても考慮を要する。一方、社会状況や保護者からの要請、学校での問題点など客観的に必要性が高い内容をニーズと考えた場合、両者の関係は図2のようなようである。ディマンドとニーズの接合部分が学習内容として有効に機能するが、のような場合は、学習者である生徒の意味地平

との融合を図ることは困難である。

皆川は、「子どものディマンドと教育上のニーズがうまくかみ合って、十分な性(エイズ)教育が可能になると思われる。そして、子どもたちとの“ずれ”を絶えず配慮しながら展開することが可能となる」子どもの実態に即した教育内容教材作り」として図2の を示している<sup>17)</sup>。このようにできる限り に近づける教育内容を構成し、教材作りをしていくのである。

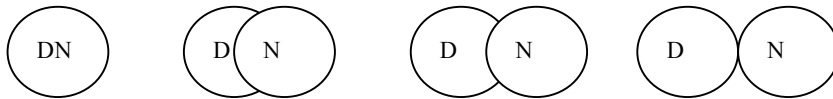


図2 Demands と Needs による学習内容 ( 皆川, 1996 の原型に追加)

一方、まだ根本的な問題が解決していない。生徒は「性について学びたいと思っているのか」である。発育発達段階にある生徒にとって心身の変化は劇的である。不安が生じ戸惑う状況も多く見られる。このような生徒が、性について学びたいと記入した内容をN県の調査<sup>18)</sup>から見ると、「男女の心理と行動の違い・愛とは何か・異性との交際の仕方」が上位を占める。しかし、悩みとして持っている内容をN県の「思春期電話相談」<sup>19)</sup>で見ると、2003年度の高校生の相談件数は1年間で565件であるが、560件は男子の相談である。相談内容は、包茎・自慰・性欲が上位を示す。女子については相談件数が少ない。これは、保健室での性に関する相談者の多くが女子であることから、女子生徒は養護教諭や母親などに悩みの相談をしているものと予測している。月経トラブル・妊娠の不安・異性との交際についての悩みが多いのである。これらを統合したものがディマンドとして考えられる。

同様に、ニーズについては社会的課題や自校の教育目標、生徒の特徴や指導者の教育観などを統合し自校化するための判断が必要となる。例えば、筆者の先行研究「ライフスキルトレーニングを組み入れた性教育プログラムの開発と評価 高等学校における介入研究」では、「性交(初経験)をできるだけ先に延ばすこと」と「ハイリスクな性行動を予防すること」という上位目標を立て、詳細な項目を示した。その結果作成した教育内容は、実践結果において有効性を確認できた<sup>20)</sup>。

### 3 2 養護教諭と「性の健康教育」の関わり

養護教諭は、日常の生徒との関わりのおかげで「こうなって欲しい」という生徒への健康期待を持つ。これは、保健指導を行おうという指導意欲につながっていく。では、高等学校の保健室へは、どのような相談が多く持ち込まれるのか。また、持ち込まれた相談の中から養護教諭は、何に「力を入れて関わっている」のか。山崎らの調査<sup>21)</sup>によると養護教諭が「力を入れて関わった」相談の上位は、妊娠や性の被害、性全般についてであり、全相談の45.5%を占めている。その他は、疾病などの管理や心の問題である。この調査の分析で山崎らは、「妊娠や性被

害は生徒が困っている状態であるのに対し、性全般は生徒が興味を持って知りたがっている内容が含まれていることから区別したが、どちらも緊急性が高い場合があることから、『力を入れて関わった』ものとして挙げられたと考える」という。保健室に持ち込まれる性に関する相談は、緊急性に応じて養護教諭が判断した内容の順位付けがされるのである。したがって、相談によっては「力を入れて関わる」ことができない次のような内容がある。3-1で示したN県の調査によれば、生徒が知りたがっている内容の上位は、「男女の心理と行動の違い・愛とは何か・異性との交際の仕方」であった。これらはどれも緊急性は高くない。また、個別指導よりも集団指導によって人とのかわりの中で感じ取っていく内容であると判断される。したがって、生徒が学ぶチャンスは低くなってしまっている。

### 3-3 養護教諭が持つ生徒観

養護教諭は、保健室を訪れた生徒に「どうしたの？」という言葉掛けで対応する。広く解釈することが許されるのであれば、大江<sup>22)</sup>が「癒される者」の中で引用した「人間にとって一番大切な態度とは何か？それは他人に向かって、あるいは隣人に向かって『あなたはどのようにお苦しいのですか』と問いかけることだ」というシモン・ヴェイクの言明<sup>23)</sup>に似ている。

養護教諭は、「どうしたの？」という言葉掛けをしながら生徒を迎える。そして、できる限り全人的・包括的に理解しようと体制を整える。訪れた生徒は、集団の中の一人ではなく、あくまでも訪れた個人そのものとして捉える。

このことは性の相談でも同様である。河合は、「ある中学校の養護教員のところに、男子中学生が相談に来た・・・(中略・引用者)・・・『性』にまつわる不安に対して、いつも安定して優しく『大丈夫』と言ってくれる女性を、この中学生が必要としていることである」「中学生たちは自分の心の中の不安を言語化できないが、体のことに託して表現する。そのときに、そのことを大切にして、もっとも身体的なチェックは医者を受けることが必要だが、後は心のこととして、しかも、それを体のことを通じて対応するのである。このようなとき、性は心と体の中間に存在するものとして、しばしば不安の対象として選ばれることが多い。養護教諭の果たす役割は実に大きいものがある」<sup>24)</sup>という。

このように保健室で養護教諭に持ち込まれる相談は、生徒にとっては日常的に重大な意味を持つ内容が多いのである。また、教室で集団の中の一人としての生徒は、表の顔で所謂一般的な自分として存在するが、保健室で養護教諭に相談する自分は、裏の顔でプライベートな自分も含めた包括的な存在である。養護教諭は、生徒を全人的・包括的に理解しようと心がけている存在だとも言える。

性についても同様である。例えば、筆者はカーケンダール<sup>25)</sup>の human sexuality の概念として「sex が下半身の問題なら sexuality は性に関する人の精神活動」を参考に図3を作成した。第1に、性は人間の生から死にいたるまでどのライフステージにも関与する。その中で思春期は



puberty ( 発毛する時期 ) という肉体的変化の表現から、近年では adolescence ( 成長すること ) という総合的包括的な表現が一般的に使われている。

河合は、思春期について次のように述べている。「思春期というのは人間の人生において実に変な時期である。それまで子どもとして一定の完成に達したように感じているところに、成人としての『性』という大変な課題が生じてきて、すごい地殻変動にも比すべき体験を強いられている」<sup>26)</sup>このように思春期にある生徒は、視野が狭く自己の心身の変化に戸惑う状況が多く伺われる。この視野の狭さを「思春期がライフステージの中の通過点であり、誰も心身の変化に戸惑う」について図3を示しながら客観的な理解を促す。

第2に、カーケンダールらが言うように、「sex が下半身の問題なら sexuality は性に関する人の精神活動」と考えたとしても性は生殖の役割を持つ。そして快楽ももたらす。さらに、快楽部分をクローズアップして商品として扱う産業がある。ここに、性を考える場合の混乱が生じてしまう。ダブルスタンダードである。また、ここでは取り上げなかったが、ジェンダーについても思春期を生きる生徒にとっては大切な課題であり、別途論じなければならない。

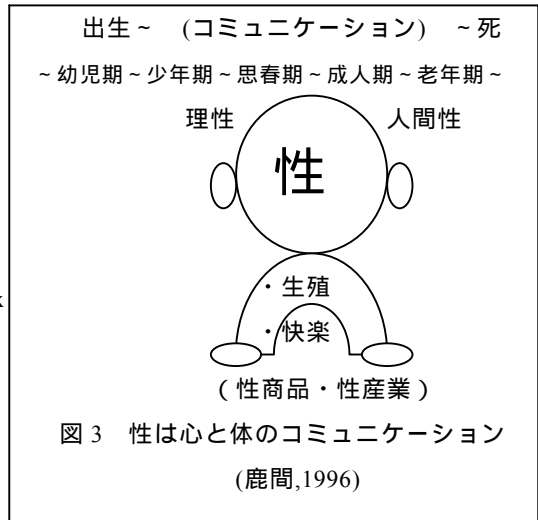


図3 性は心と体のコミュニケーション (鹿間,1996)

第1・第2の課題を「性は心と体のコミュニケーション」によって示す。どのように性を全人的包括的に位置付けていくのか。相手との関係性の中で性に関する価値観のコミュニケーションを通じた「すりあわせ作業」の重要性を伝えるのである。性教育においてこの「すりあわせ作業」の重要性を説く野末は、「健康というのは身体と心と社会その他、ウェルビーイングというものだということ、それが性の健康ということに対しては、性が根本にあって、性もとにかく生きるために大切なのだと、それを抑圧するのではなくて、積極的にもっとお互いの人間関係を高めるような性は生であると努力が必要で、今までの性教育よりもそういう意味の性教育というのが大切、向上しよう、豊かになろう、人によいものをあげたいという人間そのものの考え方が一番大切なのでしょうね」<sup>27)</sup>と述べているのである。これを養護教諭がおこなう性の健康教育の最終目標として位置付ける。

第1・第2の課題を「性は心と体のコミュニケーション」によって示す。どのように性を全人的包括的に位置付けていくのか。相手との関係性の中で性に関する価値観のコミュニケーションを通じた「すりあわせ作業」の重要性を伝えるのである。性教育においてこの「すりあわせ作業」の重要性を説く野末は、「健康というのは身体と心と社会その他、ウェルビーイングというものだということ、それが性の健康ということに対しては、性が根本にあって、性もとにかく生きるために大切なのだと、それを抑圧するのではなくて、積極的にもっとお互いの人間関係を高めるような性は生であると努力が必要で、今までの性教育よりもそういう意味の性教育というのが大切、向上しよう、豊かになろう、人によいものをあげたいという人間そのものの考え方が一番大切なのでしょうね」<sup>27)</sup>と述べているのである。これを養護教諭がおこなう性の健康教育の最終目標として位置付ける。

### 3-4 養護教諭の職務内容の変遷と性の健康教育への関与

養護教諭は3-2で述べたように性に関する指導を重要度の高い内容であると認識していた。では、生徒はどのように考えているか。久野の調査<sup>28)</sup>によれば、性教育の教授者として生徒の希望する教師としては第1位を養護教諭が占めていた。また、日常保健室に持ち込まれる相談

活動に性の内容が多い点からも性教育の教授者として望まれていると予測できる。自他共に性について教授を望んでいる養護教諭の職務の特徴とは何か。

1947年に養護訓導から養護教諭と名称を変えてからも、職務としては「養護をつかさどる」と法律的に規定されたままであった。「養護をつかさどる」とはどんな職務をおこなうことなのか。さまざまな解釈がなされてきたが、1972年の保健体育審議会答申でようやく主体的な役割が明確に示された<sup>29)</sup>。答申によると「養護をつかさどる」とは、「児童生徒の健康を保持増進するための活動」と解釈されるようになった。この答申で従来の健康管理的側面・個別指導の側面から、健康に関する教育的側面・集団指導へと大きく変わった。さらに、1997年同答申においては積極的な集団指導への関わりを目指して教育職員免許法の一部改正による保健学習における授業の担任可能措置が示された。

このような措置は、学校の実情に応じて選択肢の一つが増した点では評価される。しかし、中等学校では専門の教科担当の領域に参入する必要があるのか。保健学習に参入する以前に保健指導としての充実を目指す必要がある。特に、2-2で述べたように各教科でそれぞれ教授された性に関する内容を統合するためには教科への参入による方法ではないのである。では一体どのような方法なのか。

保健室という「教室」の中で、まずは個人または小集団を対象にダイナミックな教育活動をおこなうのである。保健室を運営する養護教諭が日常的に「力を入れている」内容でおこなうのである。例えば、生活習慣病予防教育や心の健康教育、そして性の健康教育などである。それを養護教諭の専門教科と位置付け、教育活動から得た気付きや感触を大切にする。次に、指導内容などの形式を整え指導する価値があるかを見極めたうえで学級への一斉指導につなげていく。これが保健指導の真髄である。そしてまた、一斉指導で得た気付きや感触を日常の保健室運営にフィードバックするのである。

井上は、学校教育で evaluation から assessment といわれるようになった背景を述べている。そして、assessment を新しい評価概念とした上で、「学校教育では・・・(中略・引用者)・・・養護教諭はその職務の性質上『教科』の指導よりも『人格』の指導の方に重く関与していることが普通だからである」としている。また、ポートフォリオ評価について「養護教諭の場合の活用では『子ども用ポートフォリオ』を作成し、それを保健指導の変容過程の評価資料にするのが適切であろう。・・・(中略・引用者)・・・保健室での教育の場合には、どうしても子どもの身体的、心理的特性の評価にならざるを得ないが、それでも結構有効なのである」という<sup>30)</sup>。

ポートフォリオから得られた総合ファイルが、全人的・包括的に生徒を理解するための養護教諭の蓄えた手持ち情報である。秋葉は、養護教諭の蓄えた手持ち情報を養護教諭の在庫知識と表現している<sup>31)</sup>。この養護教諭の在庫知識は、性の健康教育を学級での一斉指導として組み立てていく時に重要な要素として機能するのである。

高等学校の養護教諭は、どのような在庫知識を実際持っているのか。生徒の入学試験時の調査から始めて、1学年から卒業時まで学年を積み重ねるごとにさまざまな在庫知識を蓄積する(具体的な在庫知識に関しては別稿で論議する)。そして、生徒との関係性を深めながら養護教諭は、在庫知識に裏付けられ、それに強く支えられて性の健康教育も作り上げるのである。

以上、学習支援者としての養護教諭が生徒にとってどのような意義を持ち、機能したかを実際の実践事例を通してみることにする。

#### 4 実践 性の健康教育

##### 愛とは何だろう 性教育ライフスキルプログラム+アルファ

Y町は、瓦や焼き物の産地として各地に知られてきたが、近年では「こだわりの乳製品」のCMが全国的にTV放映され有名である。その地域と密接にかかわりをもつY高等学校は、N県内の全日制では最も小規模の高等学校で、6学級173名の生徒数である。

この小規模校の特色を生かし3年前から開始した総合的な学習では、地域の協力を得ながら県内の高等学校としては先進的な活動を行ってきた。特に、1学年では地域理解に重点が置かれ、地域の文化や産業に関する体験活動を行っている。また、他の学年においてもさまざまなテーマで総合的な学習に取り組んでいるが、養護教諭は性の健康教育を担当している。

担当するS養護教諭は性教育を、20年以上も前からの研究テーマとし、ライフワークの一つとしている。S養護教諭は、Y高等学校に赴任した年に性の健康教育も総合的な学習の1つとして取り入れる必要があると考えた。そのきっかけを作る第1歩として校内の職員研修会をおこなった。研修会当日は、学校長、教頭を初めほとんどの教員が参加し、90分間で性の健康教育の模擬授業を行った。研修会後に設けた質問や感想からは、性の健康教育実施への強い手ごたえを感じる事ができた。

さらに、学年行事、例えば修学旅行前の講話や、生活指導講話などでも性に関する内容を積極的に取り上げた。その他、保健だよりや保護者対象の研修会などを活用し多角的に取り入れたため、生徒はもとより参観する職員や保護者へもアピールすることができた。このように、性の健康に関する正しい認識や、適切な捉え方をしてもらうための基礎固めを意識的に行うことは、その後の取組や、実践に結びつけるために不可欠なのである。

以上の活動を通して理解を得て、生徒へのアンケート調査を実施した。性に関するアンケートは、生徒のプライバシーなどに深く立ち入る内容が多いため、学校現場では受け入れられないことが多くある。本来、性はプライベートなものであり、それぞれが持つ問題点は千差万別で一人一人と丁寧に対応しながら問題解決を図ることが原則である。しかしながら、日常保健室で相談活動をし、悩みを聞く中で多くの生徒に共通する問題点が見えてくる。この問題点を目に見える形で示すためには全体へのアンケート調査により、数値で表す必要がある。

性教育を実態に即した効果的なものとするためには、性に関する知識・態度・行動予測そし

て行動状況を捉えるための、対象の実態把握は欠かせない。したがって、理解を得るための方策を駆使してアンケート調査を実施し、集計と分析を行うのである。このようにして得た調査の集計と分析の結果から、性の健康教育の実施は2年生の1学期に集中的におこなう必要があると判断し、表3のようなプログラムを作成した。このプログラムを実施し、ユニットごとの生徒の感想やセルフエスティーム尺度は良好な結果が得られた。

さらに、1年後のフォローアップ調査を行った後に、表3のプログラムに加えてユニット9・

表3 性教育プログラム

( )	(ユニット名)	(活動形態・手法)	(ライフスキルの獲得)	
1	性行動と責任	イメージトレーニング	意志決定スキル	問題解決スキル
2	相手を傷つけない性行動	ストーリー学習	共感性	クリティカル思考
3	身近で起こる友達のプレッシャー	シナリオ作成	自己認識	対人関係
4	性行動の選択とネゴシエーション	紙面上ロールプレイ	コミュニケーションスキル	
5	HIV感染とSTDの理解	個人カードの掲示	問題解決スキル	創造的思考
6	青年期の行動とHIV感染	ストーリー学習	共感性	創造的思考
7	コンドームの理解	ブレインストーミング	クリティカル思考	問題解決スキル
8	性行動選択とコミュニケーション	ロールプレイの発表	コミュニケーションスキル	

10を試みる計画を立てた。これは、生徒の関心が高かったにもかかわらず、難しいテーマであり、時間の制約もあったため実施できなかった「愛について考える」である。

現在、高校生を対象にした多くの調査では、性交の条件に「愛があればOK」という回答が高い割合を示す。そこでこの漠然とした「愛」について、さまざまな角度から考えさせたいと考えた。できるだけクリアーに愛について捉えさせたい。さらに、愛という言葉の魔術に惑わされ、不本意な性行動による後悔や、望まない妊娠およびSTD (Sexually Transmitted Disease、性感染症)を引き受けるなどのリスクを最小限にとどめたいと考えたのである。

内容の構成は、ユニット1~8でおこなってきたように、ライフスキルトレーニングを組み込む。WHOの示す5セット10スキルのうちユニット9・10でねらうスキルの向上を、「愛についてのクリティカルな思考を身に付ける」とした。主な活動形態や手法はユニット9ではVTR視聴によるモデリング学習である。ユニット10ではブレインストーミングとグループ討議の手法を取り入れた。なお総合的な学習は2時間セットの連続学習でおこなってきた。

次に、具体的に示す。ユニット9ではNHK教育テレビ「真剣10代しゃべり場」という番組から「セックスを軽く考えていませんか」というテーマで、提案者の問題提起した内容に添って15歳から19歳までの男女が考えを議論する内容である。提案者は性行動に非常に慎重な女子高校生で、いまだきの軽い性行動に対する疑問を提起している。これは55分の番組であるがVTRを40分にカットして10分間は感想記入用のシートを使い感想記入の時間とした。

次のユニット10では表4のような学習活動を計画した。WHOが示すライフスキル教育の典型的展開法に添って構成した。

表4 ユニット10 「愛とは何か」「今までどんな時愛を感じたか」指導案

- 1) 中心となる知識・態度・スキル学習別内容：態度
- 2) 主な活動形態・手法：ブレインストーミング、グループ討議
- 3) 獲得させたいライフスキル：クリティカル思考
- 4) 学習内容：全国規模の高校生を対象にした調査によると性交の条件に「愛があればOK」を挙げている。

そこで、ユニット9のVTRの内容を受けて「愛とは何か」「今までどんな時愛を感じたか」についてブレインストーミングし、グループ討議をした後、発表を行い、性行動と愛の関係について考える。(所要時間50分)

時間	NO.	学習内容	学習活動	留意点・資料
10分		前時間の感想 アイスブレイキング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時間の感想を聞き、内容を思い出す。</li> <li>・カードをパズルのように刻んだものを1枚ずつ持ち、言葉を使わずに身振りだけで1つの班を作る。</li> <li>・最も早い班からポイントをもらう。</li> </ul>	感想2~3人 (カード準備) 男女別5~6人のグループ
30分		本時のテーマ  グループ構成  ブレインストーミング  グループ討議  結果発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブレインストーミングの方法を理解する。</li> <li>・テーマ「愛とは何か・今までどんな時愛を感じたか」確認する。</li> <li>・カード合わせの班を活用して5~6名ずつの班を作り、机を討議用に移動する。</li> <li>・司会者は係のシールと記録用紙を配り、係の役目を全員に伝える。(意見集約用紙の確認)</li> <li>・テーマに添った意見や思い付きをメモ用のプリントに記入、10分間で行うなどを確認する。</li> <li>・メモ用のプリントを参考にしながらブレインストーミングを行う。(班毎に数の報告)</li> <li>・ブレインストーミングの結果から内容を5項目選び班毎に掲示用の用紙に記入する。</li> <li>・班全員が前に出る。黒板の定位置へ掲示する。</li> <li>・発表者は黒板を示しながら発表し、質問や意見を受ける。(2名の発表者が協力して答える)</li> </ul>	(掲示物) ブレインストーミングの方法  司会者へ内容説明をし、用具を渡す(発表用紙・マジック・シール・メモ用紙) 記録者は用紙へ記入させる 掲示スペースの設定(セロハンテープ用意) (指示棒用意)
10分		シェアリング 感想記入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表内容のポイントを示し、疑問や気付きを確認する。</li> <li>・感想や意見などを記入する。</li> </ul>	ポイントを示す (記入用紙)

アイスブレイキング・・・パズル合わせでグループ分けをした。パズルは絵葉書を5~6分割し、一片ずつ当たるように人数分用意した。前時の終了前にあらかじめまとめ役の司会者を指名しておき、それぞれの司会者に異なるパズルの1片を渡し高く掲げさせた。クラス全員は、配られたパズルを自分と同じと思う司会者の元へ集まりパズルを完成する。事前に「早く完成した班から得点が多く加算され持ち点とする」と伝えてあるため、一生懸命グループ探し

に取り組む様子が見られた。全部のグループが完成した時点でアイスブレーキングを終了した。

テーマを示す・・・ブレインストーミングの方法を黒板掲示した後に、本時のテーマを板書し確認した。ブレインストーミングは、表3のようにユニット7で経験しているため、詳しい説明は省いたが、4つの原則（批判厳禁・質より量・自由奔放・便乗歓迎）は重要であるため再度伝えた。また、テーマについては「愛とは何か」「今までどんな時愛を感じたか」と、思考範囲が広がるように2種類提示した。

グループ構成・・・アイスブレーキングで作ったグループ毎に集まり、机を2個程度組合わせて討議スペースを作った。その間に、司会者へグループ全員の係シールと黒板掲示用の発表用紙、マジック、1人10枚ほどのメモ用紙、および意見集約用紙（考えを書いたメモ用紙を貼り付けるためA3程度に引き伸ばした用紙）を渡した。

司会者には各係の欄に氏名を記入させ、係の活動内容を確認させた。記録者には用紙を渡し、その他の用具も配布した。

ブレインストーミング・・・準備が整った状況を確認した後、「スタート」の合図をし、10分間のブレインストーミングを開始した。通常のブレインストーミングでは3～5分程度の時間で行うことが多い。しかしながら、ユニット7で行った時の感想から、「時間が短い」や「考えがなかなか出ない」などがあったため、今回は10分間とした。10分後「やめ」の合図で終了し、記録者は台紙上に貼られたカードの枚数を報告した。

グループ討議・・・各班で、カードの中から最も良いと思う内容を5項目選ぶためのグループ討議をした。班の結果は、掲示用の用紙にマジックで大きく記入し、記録係が黒板の指定されたスペースに掲示した。

結果発表・・・全ての班の掲示が終了した後、それぞれ出されたカードの枚数とアイスブレーキングで得た点を合計し、総合得点を出した。次に、全員が通常の場合に着席したことを確認し、点数の低い班から発表を行った。事前に決めた発表者は2名であるが、質問や意見を受ける際に全員協力して答えることが重要であるので、全員が前に出よう指示した。

討議結果のシェアリング・・・全ての発表が終了した後、テーマに添って重要なポイントにしるしを付け確認させた。しかしながら、本時のテーマの性質から、「出されたどの内容もそれぞれ愛について語っているものだ」と確認し、「人から愛されるためには先ず自分を好きになることが大切だ。そのためには very good な自分を求めるより good enough な感覚で自分を大切に思うことが自分を好きになる第一歩だ」という内容で締めくくった。

感想の記入・・・感想シートを記入させ本時を終了した。

**ユニット9** (1) VTRの中で印象に残っている内容についての意見感想

{男子1} 欲望で人間が動かされるなら動物と同じだから、欲望=性交ではないと思う。人間は他の動物より脳が発達しているのだから性行動を行うときにも頭を使うべきだ。

{男子2} 性交と愛は不可分なものなのか？人にはそれぞれ愛のとらえ方があると思うので、他の人の愛

についての考え方は否定できないし、自分の考えている愛と他の人が思うこととは異なるかもしれない。提案者は、『愛がないとだめだ!』という意味のことをしきりに言っているが、彼女の愛は全ての人に共通するものではないと思う。

{男子3} 自分は本当に好きな人以外とは性行動をする気にはなれない。本当に好きな人の内面をのぞきたいことと、欲望という自分の一部分を相手に見せることによって日常見られないようなお互いの内面的なことに気付くこともできると思う。ただし、大大大好きな人限定とする!!

{女子1} 提案者のことを最初は今どきの若者としては堅過ぎると思っていた。しかし、VTRの中で一部の男性発言者の性交と妊娠についての考えですごく腹が立ったことは、子供ができることについて軽く考えすぎている所が見られ、その後は提案者の意見もとても大切にする必要があると思うようになった。妊娠することは不安が大きだし、将来困るのは自分自身なのだということに気づき、しっかりしようと考えた。

{女子2} 愛があるなしについては自分ではまだ良くわからないし、自分では愛のある性交だと思っても相手にとっては違うかもしれないので、性交はお互いを理解し、信頼しあえてから考えるべきで、簡単に行うことではないと思った。

{女子3} 私は愛のない性交はできません。また彼氏が愛してもいないのに性交をしたならば、私はすごく傷つくと思います。それは逆に性交を断ったからといって愛がなくなるような恋愛は本物ではないと思います。

(2) VTRの内容を参考に自分が感じたり考えたりした「愛」について

{男子1} 愛とは、その人と交際して好きになり絶対にこの人以外考えられないと思った時に愛に変わってゆくように思う。そして、性交も含めて愛を分かち合うものだと思う。

{男子2} 愛とは、兄弟愛や親子の愛を含めていろいろな種類がある言葉で人それぞれだろう。さらに、その日そのときの状態でも形は変わるものだとも思う。自分のことでさえ、これだとは決めかねるのに、愛とは何かなど答えられないと思う。

{男子3} 趣味や考え方など好きなことが似ていると気づいたときなどや、相手のことを深く考えるようになったときなど、さらに自分のことを理解してもらえたときなどに愛を感じるような気がする。性交については、僕はやはり愛が感じられなければできないと考えている。

女子 愛は良くわからないものだと思う。好きな人がそばにいるからといって愛を感じるとはいえないと思うし、そんな簡単なことでもなさそうだ。もしかしたら私自身知らない間にいろいろな人に愛というものを沢山もらっているのかもしれない。また人それぞれ感じ方も表現方法も違い多分一生かけて探していくようなものかもしれないと思う。

{女子2} 私は愛について考えたこともなかったけれど、愛は言葉に表すことが難しいものでさまざまな愛があると感じた。その中でも性交を愛と勘違いしてしまうことも多いようだ。早く経験すれば良いという訳ではなく、人それぞれだとは思いますが性交については良く考えなければと思った。

{女子3} 恋愛状態であっても性交はしたくないときもあると思うし、性交以外で愛を感じるもののほう

がむしろ多いようにも思います。例えば、何かしてあげたり、してもらったりしたときに相手から思いがけなくありがとうみたいな言葉を聞いたときとか他のことでももっと気づかないいろいろな場面で愛を感じると思います。

#### ユニット10 感想シートより一部抜粋

{男子1}今日は久しぶりに性教育を受けたのですがすぐには積極的になれなかったが、前にやったことを思い出したりしてまあまあおもしろかった。こういう発表はやはり苦手だけれど、愛とは何かなんて今まで考えたことも無いようなことを皆で出し合って、他の人が愛についてどんなことを考えているのか少し分かった。

{男子2}今日の5・6時間目愛とはなんだみたいな事をブレインストーミングしたが、分かったことは愛にはいろいろなとらえ方があることと、やっぱり自分のことを好きにならなければ他の人から好きになってもらうことも難しいものだ分かった。

{男子3}今までの性教育の中で、一番難しいような気がしたけれど自分にとっては身近に感じられるテーマで楽しかった。自分にとって性交も愛もまだあまり考えることが無いと思うが、いつか本当の愛を知ることができたらいいなと思った。今日分かったことは、愛とは絶対に消せないものだと思うし、生きていく中できっと感じられるもののように思う。

{女子1}愛や性交についてすごく勉強したような気がする。VTRの中では、他の人が性交についてどんなふうになっているのが分かったし、皆同じように見えても、違いもあるということも良くわかった。異性についての考え方の中であまり納得のいかない発言もあったが、いろんな意見を出し合うことで相手の気持ちも理解できるようになるという気がした。

{女子2}何回勉強してもやっぱりためになるなあと思った。先生が話してくれた「自分を好きにならなければ～」ということについては、私自身すごく良く当てはまると思う。前までは、人と違う意見を持つ自分のことがすごく嫌いだったけど、今は堂々と自分の意見を言えるようになったのでそんな自分を思い出し、好きになれそうだなーと感じた。本当にこの勉強は楽しかった。

{女子3}性教育を通じて大事な人のことをもっと好きになり、大切に思えるような気がします。彼にとって私は完璧な女性でありたいと思っていましたが、そんなのは多分疲れて長続きしないと思うし、本当の自分なんてわからないけれど、ありのままでもいいんだと思えるようになりました。このままでいいんだと思うと自分に自信が出てきそうです。

以上のような感想の他に「良くわかった」(90.2%)、「おもしろかった」(87.8%)、「積極的だった」(73.2%)と、生徒は良好な自己評価を示している。

#### S養護教諭の感想

今までユニット9,10のようなテーマを試みることに積極的になれず、自信を持って進めることができない内容であった。学校で行う性教育は、生理解剖や感染症などの知識を身に付けさせるための医学教育と、人と人とのつながりの中で異性を中心としたコミュニケーションの



トレーニングを重点的に取り上げることが優先するべきだと考え実践してきた。したがって、「愛」という漠然としたあまりにもとらえどころがなく、結果を示すこともできないテーマを取り扱うことは一義的ではないと考えていた。

しかしながら、取り組んでみた結果は大きな手ごたえを感じた。手ごたえの要因は 高等学校の最終学年であり、思春期の後期に差し掛かり心身の安定に向かう時期となっていた。今まで積み重ねて来た性についての学びの中で性を窓口に生き方への思考過程も確実に成長していた。この2点から、性についても愛についても自分なりの考えを持ち、これからの生き方に反映させていくことができるようになっていた。未だ9, 10のユニットは試みの案であり、より効果的に改善しながら、生徒とともに作るいきいきとした楽しい性教育を目指したい<sup>32)</sup>。

## 5 研究のまとめ

我が国の「性教育」の経緯は、社会状況や社会的要求により変化してきた。近年は WHO の健康の定義に基づいて「性の健康教育」という用語が提起され、世界的に使われるようになった。筆者も健康を「体・知性・心・対人関係」の健康と捉え、性の健康教育を行ってきた。

この性の健康教育を学級で行う場合、生徒の「深い理解」を引き出すために、生徒のダイヤモンドと教育上のニーズの融合を図るよう配慮しながら展開をしなければならない。また、養護教諭が性の健康教育を展開する場合は次のような特徴を持つ。養護教諭は、職務上生徒を全人的・包括的に理解している存在であり、生徒のダイヤモンドと教育上のニーズの融合を図るために、日常得た「在庫知識」を活用し生徒と共に性の健康教育を作り上げていくのである。

本研究では養護教諭の実践を通して生徒から、性の健康について「深い理解」が得られたことを確認した。また、性の健康の学習活動から、「生き方」に関する思考能力を高め人格的な成長を促すこともできたといえる。

### < 註 >

- 1) 文部省社会局長通達：1947、「純潔教育の実施について」、文部省。
- 2) 文部省純潔教育委員会・安藤畫一：1949、「純潔教育基本要項・性教育のあり方」、文部省。
- 3) 文部省社会教育局長通達：1986、「生徒指導における性に関する指導 中・高等学校」、文部省。
- 4) 高橋史朗：1994、『間違いだらけの急進的性教育』、黎明書房、225頁、他これと類似の文献が多く見られる。また文献中で示されている「急進的性教育」の立場を取るといわれているグループからの文献も示されている。
- 5) 内山源：1994、『性教育はこれでよいか』、ぎょうせい、111頁。
- 6) 河合隼雄：1992、『子どもと学校』、岩波新書、216頁。
- 7) 文部省：1999、「学校における性教育の考え方、進め方」、文部省、2頁。
- 8) 文部省：1999、「高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編」、東山書房。
- 9) 長谷川充麻：1999、「本当の生活指導とは」、『発達』、通巻、77号、VOL.20、ミネルヴァ書房、9 10頁。
- 10) 佐藤晴世：2004「保健の授業に親として望むこと」、『体育科教育』、52巻、10号、大修館書店、17頁。

「性の健康教育」における高校生の成長過程の研究（鹿間）

- 11) 宗像恒次：2004、「エイズ対策とエイズ教育の国際的動向」、『学校保健研究』、VOL.46 NO.2、127 頁。
- 12) 内山源：前掲書、23 頁。
- 13) 武田敏：2004、「性の健康と教育」、『現代のエスプリ 性の相談』、438 号、至文堂、197 198 頁。
- 14) 麻生武志：2004、「座談会 性相談の諸相」、『現代のエスプリ 性の相談』、438 号、至文堂、15 頁。
- 15) 松下良平：2002、『知ることの力』、勤草書房、192 193 頁。
- 16) 田中雅一：2002、「主体からエージェントのコミュニティへ 日常実践への視角」〔田辺繁治、『日常実践のエスノグラフィー』、世界思想者〕所収、350 354 頁。
- 17) 皆川興栄：1996、「子どもの性（エイズ）教育を考える 実態調査に基づいて」、『産婦人科の世界』、第 48 巻 10 号、医学の世界社、82 頁。
- 18) 新潟県養護教員研究協議会高等学校部：2004、「高校生の心と身体についての意識調査」、49 頁。
- 19) 新潟県看護協会：2003、「平成 15 年度思春期こころとからだの電話相談件数」。
- 20) 鹿間久美子：2002、「ライフスキルトレーニングを組み入れた性教育プログラムの開発と評価 高等学校における介入研究」、『明星大学通信制大学院研究紀要教育学研究』、VOL. 2、17 29 頁。
- 21) 山崎隆恵：2004、「保健室における個別的保健指導の展開」、『日本養護教諭教育学会誌』VOL.7、1 68 69 頁。
- 22) 大江健三郎：1995、『あいまいな日本の私』、岩波新書、19 頁。
- 23) シモ ヌ・ヴェイユ著、田辺保・杉山毅訳：1967、『神を待ち望む』、勤草書房、(2002) 98 99 頁。
- 24) 河合隼雄：前掲書、218 219 頁。
- 25) L・A・カーケンダール著、波多野義郎訳：1972 .5、「現代社会における性の役割」、『現代性教育研究』季刊 1 創刊号、財団法人日本性教育協会、小学館、133 137 頁。
- 26) 河合隼雄：前掲書、188 頁。
- 27) 野末源一：2004、「座談会 性相談の諸相」、『現代のエスプリ 性の相談』、438 号、至文堂、14 頁。
- 28) 久野孝子：1996、「性に関する理解度と性意識・態度・行動との関連」、『第 43 回日本学校保健学会講演集』、398 399 頁。
- 29) 三木とみ子：2002、『養護概説』、ぎょうせい、14 頁。
- 30) 井上正明：2000、「評価とは その意義、種類及び方法を中心に」、『健康教室』、臨時増刊号『評価』と養護教諭、51 巻、2 号、4 11 頁。
- 31) 秋葉昌樹：2004、『教育の臨床エスノメソドロジー研究 保健室の構造・意味・機能』、東洋館出版、93 頁。
- 32) 鹿間久美子：2003、「愛とは何だろう 性教育プログラム+アルファー」、『健』、2 月号、31 巻 11 号、日本学校保健研究社、83 88 頁。

主指導教員（齋藤勉教授）、副指導教員（井上正志教授・柴山直 助教授）